

東九州支部報



青少年体験登山大会(7月19日)・牧ノ戸峠にて

今年も青少年体験登山大会が去る七月一九日(日)、九重連山の久住山を中心に行われた。二〇〇二年一月に、国際登山年を記念して青少年に山登りの楽しさを、面白さを体験してもらおうと、越敷岳・緩木岳で実施して以来今年で八回目を迎えるこの大会である。第一回大会は、昨年のおおむね隔年ごとに好天に恵まれたが今年はいくこの曇りと強風の登山となった。朝七時に大分駅出発でバス二台で準備した当日は、四名の参加者が乗り込んで予定時刻を若干過ぎた午前七時一〇分に出発。途中、湯布院の道の駅でトイレ休憩して九時一〇分過ぎに牧ノ戸峠に到着。ここで現地集合組と合流して参加者は合計六〇名になる。出発点の牧ノ戸峠は頭上に深く霧がたれ込めて、北東方向からたえず強い風が吹きつける、あいにくの天気である。レストハウス横に集合して出発式で、加藤会員があいさつ。続いて、登山中の注意事項の説明等を行ったあと、健脚組(中岳・久住山)、元氣組(星生山・久住山)、のんびり組(久住さんのみ)の三班に分かれる。これは参加者各自の希望をもとに分かれることにしたため、健脚組は二五名、元氣組は六名で、参加者の大半がのんびり組に集中したため、のんびり組をさらに二班に分ける。九時三〇分に健脚組から順次出発していく。登りははじめるとすぐに霧の中の階段道で、途中の展望台

第八回青少年体験登山大会 霧の久住山で山登り体験を

飯田勝之

《 も く じ 》

第8回青少年体験登山大会	1
丸笹山	2
岩井川岳	3
三ツケ峰・十種ヶ峰・高岳山	4
桑原山	5
夜星	6
英・湖水地方トレッキング④	6
アルプス旅行記③	7
九州脊梁山地縦走の報告②	8
私の無名山ガイドブック 39	10
お知らせ	10
後記	11

も霧の中である。そして、沓掛の東の肩に登ると、霧にくわえて強い風である。時折り強風に運ばれて小さな水滴が頬にあたることもあるが、今すぐ降り出しそうな気配ではない。まだ梅雨の明けきれない稜線道は、いたる所にぬかるみがあり、子どもや高齢者は足をとられて大変である。天気はあいにくであるが、三連休の中日でもあり、一般登山者もかなり多い。狭い道は大人数の我が隊は離合にも大変である。

風と霧の中を健脚組は御池から中岳へと回って、一二時〇〇分に久住山頂に着く。元氣組は西千里から星生山に登り、強風の岩稜歩きを避けて西千里に戻り、一二時二〇分に久住山頂につく。その時にはもうとつくにのんびり組も山頂について弁当を開いていた。



(霧の中の久住山頂にて)

相変わらず吹き付ける南西からの強風を避けて、北東の斜面に散らばって全員が持参の弁当やビールやコーヒーやプリンなどをおなかに入れる。

風が強いので山頂での記念写真の撮影はやめて、久住別れで撮ることにして一二時四〇分以下山にかかると。久住別れ下の小屋の前は盆地状なので風も弱い。ここで三つの組ごとに記念写真の撮影を終えて、順次牧ノ戸めざして下り始める。

(お母さんに手を引かれて)



扇ヶ鼻への分岐を過ぎたあたりから、時折り霧が流れ去って視界が開け、沓掛の稜線や長者原あたりの景色が見えて、その都度歓声が上がる。下るにつれて次第に雲の下を歩くようになり、まわりの霧がなくなると、気分的にも明るくなり、下りと言ふこともあつてにぎやかなおしゃべりがあちこちから聞こえるようになる。

午前三時三五分に全員が無事に牧ノ戸峠に下山する。ここで全員そろって解散式である。今日の参加者は小学生以下が六名であったが、中には五歳の子が二人もいて「きつかったけど楽しかった」と意見を聞かせてくれた。また、参加者の中の高齢者では七六歳と七七歳が各一人で、最年少者、最年長者各二名づつが紹介された。続いて加藤会員が「来年も是非また参加して下さい」とあいさつをして、現地集合組は解散。貸切バスの組は大分駅へ向かって帰途にいた。

月例山行報告

丸笹山

(六月月例山行)

宮本 真理子

六月の『山といで湯』の山行は宮崎県・美南町旧南郷村の丸笹山と南郷温泉である。六月二一日(日)午前四時過ぎに参加者全員サニーに集合。西さん、飯田さん、遠江さん、宮本の四人、中野さんの車に乗せて頂き出発。途中、めいめいに食料補給を済ませ、犬飼より三重、宇目を経由し宮崎県へ入る。延岡の手前にさ

しかかった所で飯田さんより西南戦争末期に政府軍に追われた西郷軍が熊本から退いて南下行軍していった山々だとの歴史解説を聴きながら右手の山々を仰ぎ見る。可愛岳(えのたけ)という山である。政府軍を併せると何千、何万の人数が必死の思いで南下していったらしい。暫し、歴史の中に翻弄されていった人々の無念さを感じる。東郷町の若山牧水生家の前を通って「ひむか神話街道」に入り、丸笹山に通ずる林道へと車を進める。林道は途中で工事中で行き止まり。「登山口は行き過ぎたらしい?」登山口を探しに男性軍が車で下っている間、女性軍はちゃっかり工事現場詰め所の仮設トイレを拝借する。

お二人は屏風滝近くの林道沿いに登山口を発見。女性軍を迎えにきてくれ、車で登山口へと移動する。三時間以上の車中での鈍った体を各自ストレッチで登山モードに乗せていく。

朝の清々しい空気が漂う中、八時一〇分登山開始。一気に急な山道となり、眠気も吹き飛ばす。屏風滝の上を巻きながら登っていく。さわやかな水音と緑の光の中を、歩いていくとマイナスイオンをいっぱいに浴び、とても爽やかな気持ちになる。

つるつると滑る沢を慎重に渡り終え、広葉樹林帯の尾根を飯田さんには木々の名前を尋ねながら、中野さんから飛び出すUFOの話の数々を聞きながら皆、和気藹々

の中登って行く。途中、山の斜面が崩壊しているところの上に出て、眺望の開けた所で休憩となる。遠くに見える山の名を「空野山」「オサレ山」「雪降山」などと教えてもらう。ちよろどその時崩壊した崖の、はるか下の方に一匹の鹿が突如あらわれ、崖下を横切っていくのが見られた。この場に居合わせたものでしか味合うことの出来ない至福の時を過ごす。

照葉樹に混じってアカマツ等の針葉樹も目立つ中を進むと、前方に斜面が崩落してむき出しとなった山肌がぶつかる。九時三〇分、中野さんがGPSで頂上に繋がる尾根のピークを探し出してくれる。飯田さんを先頭にアセビの群落の中を進むと稜線が近くなり、あたり一面スズタケが枯れてしまつて地面がむき出しとなっている。



(山頂付近からみた烏帽子岳)

「昔は藪こぎで大変だったが、その醍醐味があったのに・・・」と飯田さんが呟く。「きつと、中国からの大気汚染が原因ですよ」と中野さんが力説する。

山行から帰った六、二六付けの朝日新聞に宮崎県衛生環境研究所がまとめた報告として「越境汚染」をめぐる現象として大陸からの酸性雨が影響しているとの記事を読み、中野説を確信することになった。

九時五〇分山頂到着。山頂は木立の中で、梢の上から遠くの景色が見えるが、どっちを見てもみな山である。二等三角点の前での西さんの儀式も済ませ、皆で記念撮影となる。先ずはビールで乾杯！少し早めの昼食となる。



(丸笹山山頂にて)

一〇時三〇分下山開始。途中かじかの鳴き声に似た(ヤマガエル)？の大合唱に送られ、あせび

の群落を抜けた所で前方に三方岳を臨むことが出来た。大崩落の山肌をすそ野に姿をみせた鹿にも別れを告げ、一時五〇分無事下山する。登り一時間四〇分、下り一時間二〇分の、森林浴を楽しみながらの山行であった。

下山後の温泉浴は南郷温泉のナトリウム炭酸水素塩泉にて、トロツとした抜群の泉質にて露天風呂からの遠くの山々の眺めもすばらしかった。南郷村は百済の里としても有名で七一八年壮健の大仙祀

命と百済王が祀られた神門神社は国の重文にも指定。その他にも西の正倉院等の文化施設もあり、百済伝説を探ってみるのもおもしろそう。

帰りの車中はのんびり三人を含め「壮絶ほら吹き大会」と化す。みんなで笑い転げて一六時〇〇分過ぎサニー前到着となる。長い行程を山道も含め、お一人で運転していた中野さんに一同深く感謝です。

参加者：飯田、遠江、中野、西、宮本

岩井川岳

(七月月例山行)

久保洋一

今月の山行は九重の岩井川岳

と赤川温泉である。瀬の本からやまなみハイウェイを五分ほど牧ノ戸峠方向へ戻ると右側に作業林道の入口がある。ここが登山口だ。ここにはちゃんと登山届けボックスも設置されている。

植林の中を進んでいく。少しひんやりして気持ちがいい。緩やかな傾斜をゆつくり登っていく。スギ林の中の林道をしばらく行くと終点で、その先はそのまま自然に登山道となる。ここまでが二〇分程である。

登山道に入り林道を登るときのような開放感はなくなった。少し暗いアセビ林の中、圧迫感さえ覚える。かなり急な上がりだ。黒ぼくを踏みしめながら徐々に高度を稼いでいく。登るにつれてかなり深いガスの中となる。しばらく樹林の中を進むと登山道が北東から南東へ進路を変える。このあたりから徐々に明るくなり、晴れてい

れば岩井川岳の山容が見えるのだから今日はいかにガスがかかっているか見えない。樹林を抜けると傾斜は緩やかになり、一面の草原の中を踏み分けた細い登山道が続いている。草原に出ると少し風も吹いている。さらには進むと扇ヶ鼻と岩井川岳の分岐にいたる。

南の方に進めば岩井川岳だ。ほとんど平坦な草原の中を進んで行くと、ところどころにユウスゲの花が咲いている。まさに万緑叢中紅一点ならぬ黄一点だ。踏み分け小道をやや下りながら一〇分ほ

どで岩井川岳の三角点のあるところだ。でもここは山頂という言葉のイメージとは程遠い。高原の台地だ。三角点は南西に傾斜する台地の、かなり南によったところの草の中にポツンとある。

(岩井川岳山頂にて)



三角点を囲んで山頂の記念撮影。西さんを残して他のメンバーはさらに扇ヶ鼻へ登った。扇ヶ鼻山頂はガスで周りがまったく見えない状態だった。風もかなり強いので、岩陰で昼食を澄ませ、記念撮影をして早々に下山開始。途中で西さんと合流して下山した。

その後、時間もあるのであざみ台と白丹にいたる道沿いの牧場の中にある三角点(白丹)にたち寄り、レストハウスの横や牧場の中で記念撮影をして、赤川温泉の予定を変更して、その少し先にある久住高原コテージの温泉に入って解散。

参加者：安部、飯田、久保、遠江、中野、西、宮本

(あざみ台三角点にて)



(白丹三角点にて)



三ツヶ峰、十種ヶ峰、高岳山

(八月月例山行)

中野 稔

お盆の月である八月は登山にとつては、特別なものである。御先祖の霊が里帰りするという事もあり、母は忠実に年次行事を守っていた。個人的には、幸せは、仕合せが正しいと思う年齢になってきているし、自然界は仕合せで成り立っていると思う。

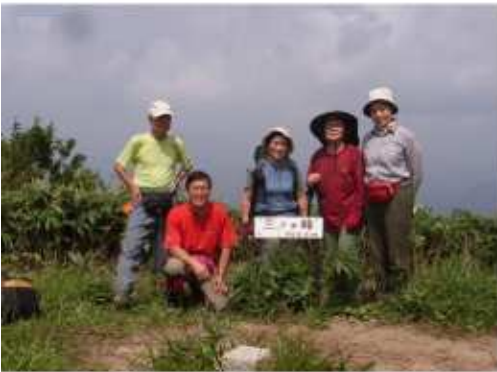
八月二十九日(土)午前五時定刻にサニーを出発、別府経由で中津の旧道に立ち寄る。宮本さんと友人の原田さん(中津山岳会)のお二人さんを乗せ、準高速の様な道路を北九州空港のインターをめざす。北上するにつれ車が多くなり朝の混雑が気になり出した頃、高速道路に着いた。山口JCTからは中国道に入ると、噂どおり交通量は激減する。お陰で、八時前後に鹿野ICに着き、国道三一五号線にて北上すると、去年の月例山行で登った飯ヶ岳(937.3m)の東尾根の峠を通過する。

山口県と島根県の県境の山を、何故か三座登る事になる。柚木慈生温泉辺りから東に延びる県道一二三号線と県境の仏峠を目指す。仏峠から尾根道を南下すると勘ヶ岳の北尾根にある弟見山に行ける。

野道山登山口を過ぎると最初の目的地、三ツヶ峰(みつがみね・938.9m)登山口だ。沢ルートで山頂の西鞍部に出て、三ツヶ峰から県境尾根を南下すると仏峠に至るルートをとる。

九時二一分登山開始。ホホトトギス、マツガゼソウ、ミズヒチキツルリンドウ、アジサイ、オニユリ、シラユリ、ツユクサ、夏の終わりを彩る花々たちに思い出が揺らめく中を静かに歩を進める。登山道は踏み込まれていて迷う心配はない。鞍部に出る手前に「佐波川源流」の木碑がある。源流ブー

ムの名残なのか、自然崇拜の畏敬の念の表れかは知らないが、大分県にも源流の碑が何箇所かある。大地に浸み込む雨水は地下の川を形成し到る所で湧き出す。マグマの近くを通過する地下水は温泉となり人々の心と体を癒す訳で、(三ツヶ峰山頂にて)



今年の月例山行のテーマに成った。一時四〇分に四人が降りてきた。十一時過ぎに山頂に着き昼食休憩となる。展望は期待以上で、明日登る高岳山、これから登る十種ヶ峰(とくさがみね)と徳佐盆地(とくさ)が見える。モヤがかかっていた快晴とはゆかないがこれでいいのだ。

十二時前に下山開始。四名は県境尾根にて仏峠を目指すことに。小生は登ってきた道を下り、車で仏峠に迎えに行くことに。

登山口まで三十分で着く。下山時にはゆっくり行く事は至難の業だ。一時間前に峠に到着すると、「クマ注意」の看板が二枚ほどある。先日インターネットで、祖母傾山系でクマを見かけたという報告が二件ほど掲示板に出ていたと、久保君から報告が有ったばかりだ。思うから。



(十種ヶ峰山頂にて)

一五時五五分に駐車場に戻り、今宵の野営場所探しへ。上る時に見たオートキャンプ場の事務所へ申込み、使用料を払う。キャンプ場の広いグラウンド横の立派な屋根付き炊事場を貸切OKだ。早速準備だ。足るところを知れば、何も不自由な事はこの世にな

中今夜の宿になった東屋のキャンプ場脇を通り過ぎ駐車場へ上る。八合目ほどのところにあるのに山

の人が準備でおおわらわである。駐車場を二四時五〇分に出て、三十分余りで山頂に到着。十種ヶ峰(とくさ)別名「長門富士」と呼ぶらしく展望は申し分ない。健脚の登山者は神角バス停から九十分で山頂とガイドブックにあるのでお勧めだ。登山とは自然との無言の対話をする為のものだと小生は



(野営場となる炊事場)

朝は四時に起床して、五時に今日の目的地高岳山の登山口に向かつて出発。何事も前向きに考えた方が楽しい。「佐賀のがばい婆ちゃん」の言葉によると、「後ろ向きには歩きづらいからな」だそう

五時半過ぎに登山口に到着。六時半に林道終点。本格的な登山道に入る。八時過ぎに江戸時代の山道を彷彿させる桐ヶ峠に着く。九時過ぎに高岳山(1040.7m)到着。



(高岳山三角点にて) 三角点付近は樹林の中で展望は

桑原山

(九月月例山行)

牧野信江

ないが、二分ぐらいで展望所に着く。津和野の街や徳佐盆地が見渡せる。桐ヶ峠から南西へ尾根道を行くと九十分で昨日登った三ツヶ峰に着くらしい。荒れ気味の登山道は植林による自然破壊の跡りを甘んじて受けるべきだ。

九時半に下山開始、十時過ぎに峠、十一時四十八分駐車場着。

「ハイヌーン」に願成就温泉に着。何故か義経の彼女(静御前)のブロンズの像堂がある。(近くには静御前の墓もある)歴史的信頼性はさておき、ロマンスを尊重する事にしよう。願いが叶う温泉とくれば「何も言う事はない」。いま風に言えば「ドリム・ハンター」か「ドリカム」温泉かな。一時過ぎ、温泉の前の広い庭で昼食をとり、その後は一路帰途につく。

参加者：西、飯田、宮本、原田、中野



(静御前像)

九月二十七日(日)午前五時サ

ニ一発。今月の予定は木山内岳と藤河内のユートピア温泉だったが、一二月の忘年登山とダブルことになりそうなので、出発前に協議し、急遽桑原山に変更することになった。中野さんの車に五人で乗る。神麻さんの久しぶりの参加だ。

犬飼から中九州道を通って千歳・三重を通って宇目へ。宇目の唄げんか大橋を渡る時、西さんが日本山岳会の集まりで『宇目の唄げんか』を歌い、座布団をおんぶして出しものをやったと話され、子守歌を歌った。北川ダムを過ぎ、桑原トンネルを出ると右折する。そこはすぐに左右に道は分かれて、予定通りなら右へ藤河内に行くのだが、左に曲がる。黒内の集落を過ぎて少し上に「上人の岩屋登山口」の看板がある。そこを右に入り、舗装の林道を上ると終点に車三台ほど置ける広場があり、そこに車を停める。

出発の仕度をしてしていると宮崎ナンバーの一台の車がやってきた。こんな早朝に・・・と思ってる、降りてきた男性一人に女性二人の三人組はやり山登りとのこと。登る人の少ないこの山に同時に車

が来るなんて意外だ。三人も上る仕度始めた。

六時四十分出発。ここは標高五〇〇m。登り口には「八本木山登山口」と書いた大きな標識があり、上人の岩屋についての説明板があり、目印のテープが所々についており、傾斜もそんなに急ではなくて比較的歩きやすい。

七時四十分上人の岩屋着。大きな岩屋の前には九体の石仏があり、廻国上人によって掘られたとの伝承があるところだ。



(上人岩屋にて)

岩屋から稜線に向かって登っていくと、まもなく具境の稜線になる。あとは気持ちのよい林の中の稜線登りが続く。長い登りだ。途中で追い越していった三人組が立ち止まって地図を見ていたが、「矢立峠はまだですかねえ?」と聞いてきた。登山口を間違えて、

登っていたのだ。「このルートは具境尾根で、矢立峠のルートは、さっきの登山口からもう少し上の林道を入ったところだ」と現在地を教えると、納得していた。間くと延岡からきたという。このあとずっと、私たちのあとをついて登ってきた。

標高一〇〇〇mを過ぎても、林の床には下草はない。飯田さんが「このへんから上は、以前はスズタケが密集していて、ヤブこぎしながらの登りだったけど、最近は何となくなくなってきている。温暖化のせいなのだろう・・・」と気にかけておられた。

上に登っていくとまだ枯れ残ったスズタケが、まばらに見える。「このあたりは、数年前まではずいぶん濃いヤブだったんだけどねえ」と言いながら登る。ヤブが枯れて露出した地面がザレてすべりやすい。

九時五十分、矢立峠からの道と合流すると、そのすぐ先が三角点のある山頂で、さらにその少し奥が石の祠のある山頂だ。

九時五二分、一四〇七、九mの桑原山山頂着。石の祠の前で食事をとろうと腰を下ろしたところ、急に雨が降り出した。頂上の手前から次第にガスが深くなってきたが、ついに降り出したのだ。それも本降りのようで、食べかけた弁当を閉じて、あわてて雨具をつけ、うーと一〇時一〇分、早々に下山開始。

幸いに激しい雨ではないので、『鉾泉』の山行を楽しむことが出来た。

(桑原山三角点山頂にて)



一二時ちょうど、上人岩屋について、ここで雨宿りしながらゆっくり食事をとる。

一二時五〇分に登山口に到着。降りついたら雨が上がり、晴れてきた。今月のテーマは『山と温泉』だ。予定は藤河内だが、山が変更になったので温泉も変更。決めた行き先は弥生の道のお湯へ。し

(鉾泉センター直川)



途中の看板を見てみた「あつ、こがよさそ」がよさそ

「直川」へ変更。一四時に到着。隣には農業歴史資料館や珍しい昆虫館もある。お湯は少しぬめりのあるやさしい鉱泉である。ゆっくと楽しんであと、一四時四十五分にて大分へ向った。

参加者：飯田、神麻、中野、西、牧野

夜星(三等三角点・572.1m)

安部可人・久保洋一

中野氏からGPSのマップ入手。テーマの二等、この山行かざるを得なかった。あとで「まさか行くとは思わなかった」と中野氏。七月三十一日、蒸暑く、無風、大汗、熱中症を心配した。伏野から近郷地区を過ぎ、1.5k、カーブ509の峠を南へ入り駐車、8.00出発。南へ300m、東へ変化600m、カヤの草深い林道は大マムシを見て大岩壁にぶち当たり終点。一番の難所。私たちは南(中野ルートは北)を巻き、ミツバ

チの箱三つ、人工の洞穴(地質調査)あり。すくいやなトラバース、危うい急斜面(ロープ忘れ後悔)、久保君は先に縦走路に上がり、560台地、8.50。ヒオウギ咲く石灰岩の樹林帯を東北東へ二五分、中間点613m到着9.30、南の眺望あり。五分行くと、トンガリの稲積山、手前に夜星が見えて、方向は明確、510m鞍部までならかな100m差の姿の見えない下り、声をかけあう。まずカヤ、2m高の細竹のやぶ台地150m、再びカヤと小かん木、数回ハチ来襲、7m有効のハチ用スプレー使用。鞍部着10.10。小石混じりのかん木帯の登り一〇分でひらけた夜星三等三角点到着、10.30。二豊山岳会の稲積山572.1mの山名板あり。本物の稲積山はすぐ600m東にあり。久保君だけこの山を予定していたが、その先のヤブ、蒸暑さ、三角点なし、GPS本人無携帯を考慮断念。

(地形図・中津留)

(追記)稲積山は十数年前、月例登山で南の三軒家から猛烈なやぶこぎの直登に参加している。

イギリス湖水地方 トレッキング④

下川智子

六月二十一日(土) 七日目

ホテルから登山口までタクシー。九時五分登山口スタート。

牧草地を歩き始めるとすぐに雨が降り始める。しばらく行くと珍しいホロホロ鳥を見かけた。十一時半、小休止。雨が強くなり雨具をつける。牧草地の中を石垣に沿って進みアップダウンを繰り返しながら激しい雨の中を進む。雨が激しいので短い休憩を取りながら早足で進む。視界が悪くアンガスが二、三度道を間違える。

宿に着いたときは全身びしょ濡れ。しかし宿は部屋が広く、設備も整っていて、女主人も親切で料理もおいしく申し分ない。終日雨で疲労も激しかったけど、宿が良かったので疲れも取れる。オートンからカークピーステファンまでの18kmを六時間で歩く。

六月二十二日(日) 八日目
(最終日)

終日「雨」の予報の中、九

時三〇分出発。スタートからかなり速いペースで進む。歩き始めてすぐに上り坂になる。ゴロゴロとした石だらけの道を登り続ける。一時間ちよつと歩いて小休止。雨と風が激しくザックからうまく食べ物を出せない。さらに一時間歩いて山頂。

九つの大きなケルンがある。山頂までの三〇分の上りは猛烈な暴風雨で視界も悪く足元は泥んこ。風で吹き飛ばされそうになりながら必死で登る。雨具をつけていても雨が顔に当たり目を開けていられない。山頂では立っていられないほどの風と雨で急いで下山コースへ進む。

背中のザックカバーが強風で吹き飛ばされ、何度つけてもすぐ外れる。足元の牧草地は泥のようになり、道なき道を一列縦隊で風に飛ばされないうような身体を低くして全員必死で進む。

小さな川がみるみる水量を増し、濁流になって恐ろしい勢いで水しぶきをあげている。飛び越えられる場所を探しながらストックを使ってやつと飛び越える。アンガスの的確な判断がなければどこをどう進めば良いか全くわからない。強風と曇まじりの雨で手は凍え、身体も冷たくなり皆無言で進む。山頂をスタートして一度の休憩もなく黙々と歩

き続けて「時間半。アンガスの「まもなくシェルターがある。」の言葉に希望が湧く。

一二時四〇分、シェルターにて遅い夕食。シェルターの中は二つの大きな木のテーブルと長イスがあり、二〇人くらいが収容できる大きさ。食事を取り始めるが寒さで体の震えが止まらない。

風雨もさらに激しさを増し危険なので下山を急ぐ。増水し濁流となった川を皆で力合わせて突破していく。横殴りの雨の中、ひたすら歩き続けコース最終地点のケルトに到着。皆、万感の想いを胸に抱き合ってゴールを祝う。

八日間のトレッキングの最終日がこれほどひどい天気になるとは想像もしていなかったけれど、逆に言えば、これほどの悪条件の中、アンガスの好リードの下、皆で力を合わせて達成した喜びは格別なものがあった。皆で記念の写真を撮り、迎えの車を待つ間、近くのカフェで温かい紅茶を飲んで一息つく。

宿での最後の晩餐の後、アンガスよりコースト・ツー・コーストウエストトレイルの達成証明書を各自渡される。初めての海外トレッキングを外国人グループのツアーに参加することは体力はもろろん言葉の不安もあり、どうなることかと思っていたが、ア



ンガスや六人のイギリス人と八日間行動を共にし、観光旅行では味わえない貴重な体験をすることができ、今後に繋がる大きな自信になった。

(以下次号へ)

アルプス

旅行記 ③

星子貞夫

7月24日

今日はいよいよ最後のハイライトであるモンブラン山群空中横断の日である。4時半に目覚め空を見ると満点の星空である。山を見ると山頂のエルブロンネルと中間駅の明かりがみえる。ひと安心してまた眠る。

モンブラン山群空中横断のロー



プウエイは風が強くなると欠航する。これが動かないとモンブラン・トンネルでシャモニーに帰らなければならぬ。
プラサ・デ・モンテビヤンコからケーブル乗り場までタクシー二

台でのユーロであった。

クールメイユールの高度は1285mで九重の牧ノ戸峠とほぼ同じ高度である。



にモンテローザの山塊がみえる。空は快晴である。回廊を下って雪原に降りる。ここから歩いて対岸のコスミック小屋に行く登山者がザイルを結びあっている。

1960年の名仲間とモンブランに登り、そして1968年に境氏、長澤氏と再びこのルートを歩きモンブランに登頂した。そのルートが見える。今も歩いている人々が見える。感無量である。

三連のゴンドラをテレキャビンと呼んでいる。速度が落ちてゆっくりとUターンする箱から人が降りる。素早く乗客が乗り込む。四人が乗り込むと自動で扉が閉まり速度が速くなる。そして380mも高いエギュー・デイ・ミデイに向かつて空中を5m移動して行く。眼下に広がる氷河と荒々しいク

レバス、周囲を囲む針峰群が姿を変えながら目前に迫ってくる。エギュー・デイ・ミデイの展望台で更に山々を堪能し中間駅を経由してシャモニーに下る。

私が初めてシャモニーを訪れた時にも食事をした日本レストランのサツキはリニユアルして繁盛している。シャモニー最後の夜を全員で日本食を楽しんだ。

7月25日

ツェルマットはあの奇怪な姿のマッターホルン、そして初登頂の悲劇の物語で一躍有名になった町である。そしてさらにマッターホルンの北壁はアイガー、グラランド



ジョラスの北壁とともにアルプス三大北壁と呼ばれている。駅を出ると途端に馬糞の匂いに満ち溢れていた町が電気自動車に変わって今度のは歩くのが危なくなっている。

繁華街は唯一本道だけで人々が溢れている。ホテル・アルファ・ツェルマットは駅の近くヴイス川の畔にある。窓からはマッターホルンが正面に見える。各自自由行動で町を散歩する。

7月26日

マッターホルン478mの一般ルートはヘルンリ稜のルートである。3260mの位置にヘルンリ・ヒュテがあり、登山者はここから午前4時にスタートして頂上を極めて下山する。

今日はケーブルでシュバルツゼーまで登り、ヘルンリ・ヒュテまでのトレッキングである。早朝晴

れてモルゲンロートに山頂を輝かしてマッターホルンが、ガスで全身を見せてくれない。ケーブル終点近くで小雨が降ってくる。歩きだすにつれて雨も止み、トレッキング日和となる。

ヘルンリ・ヒュテのレストランのテーブルは満席である。やっと一角を確保して食事をする。食後



マッターホルンの基部の岩壁まで登り、岩を手で触り頼みせて偉大な岩峰の感触を味わう。

下山後モンテローザ・ホテルの地下食堂でチーズフォンデュとミートフォンデュを食べる。ツェルマントに来るたびに此の店で食べれていたが、今回は肉の角切りがスライスに変わっていた。なんだか日本のシャブシャブ風である。スープがとても美味しかった。

7月27日

登山電車でゴルナーグラートまで登り、トレッキングでリッフェルベルグまで歩く。ゴルナー氷河の対岸に登えるモンテローザ、リスカム、カストール、ポラックスの双子の山、ブライトホルン、テオドル・コルそしてマッターホルン等パリスアルプスの山々を眺める。ながら高山植物や湖に映る山や羊の群れに出会いながらの下りである。

下山後ツェルマント・ミュージヤムで歴史を学び、スーパーで各自食べたい物を籠に入れて買い集め、ホテルから食器を借りて、野外食会をする。



7月28日
今日はウエンゲン (Wengen) に移動する日である。旅の初日に続き

今日も二回目の失敗で始まる。

ツェルマントからサンモリッツまで氷河特急がある。すべて予約制で車内は特別である。列車の通過ルートは同じなのでかまわずに乗ってしまった。どうも様子がおかしいので駅員に聞いて間違いがわかり乗り換える。

ブリグ、インク・ラーケン、ラウターブルンネンと列車を乗り換えてウエンゲンに着く。途中スピーツを過ぎると列車はトゥンナー湖のほとりを走る。氷河の水を集める湖の色は白みかかった青である。湖にはヨットが浮かび、遠くに遊覧船が走り水辺では水泳をしている人もいる。

荷物は前日に別便で送ってあるので初日ほどの苦労はない。荷物さえ無ければ旅も楽である。インク・ラーケンはその名のとおりにトゥンナー湖とプリエンツ湖の間、つまり両湖のインクターにある町である。ラウターブルンネンは太古の昔に氷河で削られたU字谷の中にある町である。岩壁から無数の滝が落ちている。

「かつて此処は氷河に満たされていた、ウエンゲンと対岸のミュレーンには水を歩いて行き来していた。今では登山電車とケーブルを使わねばならなくなった。そしてその谷底に鉄道がとおり、町が出来た。」これは私の白昼夢である。

このラウターブルンネンで最後の乗換をしてアプト式の電車でウエンゲンの町に着く。私が最後にこのウエンゲンの町



に来たのは1952年であった。当時と町の様子が変わっていて又迷ってしまった。いや変わっていないけれども良く覚えていない。ようやくホテルを見つけ落ちて着く。ところがホテル・ペーレンは熊をマスコットした家族経営の小さなホテルであるが、エレベーターがない。交渉してホテルの若者に荷物を運んでもらう。

町の噂ではホテル・ペーレンはレストランも経営していてその食事は最高であるとのことである。エレベーターは無かったけれどそれで帳消しになったのかも。三泊四日の夕食のおもてなしは最高であった。

(以下次号へ)

九州脊梁山地 縦走の記録 (その二)

下川 幸一

本日は国見岳を盟主として霧立山地に対峙した尾根の縦走で、国見岳を除けば登山標識のない山、あっても完備していない山が多く、地図・GPS必須である。山頂一帯では自然林が残り、新緑やマンサク・シヤクナゲの花で楽しませてくれる山地である。

四時起床。五時一五分に三方山目指して出発。大きな老木の分水古榎(約300年の樹齢)を過ぎ、三方山山頂(1575m)に着いた。樹木に囲まれ展望はよくない。三方に平尾根が延びており、そのため三方山と名づけられたようだ。本日予定の国見岳・高岳が木々の梢の向うはるか彼方に見える。

三方山から稜線道を下ると切剥ぎに通じる林道に出て、これを逆向きに下ると一〇分足らずで権矢峠へ着いた。林道権葉矢部線の峠で、目の前には天主管が大きく迫って見える。

権矢峠から権原側に少し下って六時三〇分に高岳の登り口に着いた。ここには貴重な水場がある。今回の縦走コースには水場が少な

い。ここで各人共容器いっぱいの水を確保する。目の前の林道の広くなった地点に「九州山脈脊梁全体コース」の案内板があった。

高岳へは水場の谷からいきなり急登がはじまる。踏み跡も目印もないが、まばらなスズタケの中をジグザグに登る。以前は猛烈なスズタケのブッシュであったというが、このあたりもスズタケが枯れてまばらになっているので、ヤブこぎもさほどきつくない。

やがて高岳山頂(15632m)に着く。登山口より三五分で順調なスタートである。国見岳への縦走路の取り付きがわかりにくい。先頭の飯田さんは自信をもって進んで行く。高岳から二〇分ほど下ると古い荒れ果てた林道に出た。この林道が稜線を縫うようにして、緩やかなアップダウンで続いてい



る。「えらい、だれたきたるが

こかー、場がええからちつとよこうていかんですか。こつから、50分ぐりやー行たとけー展望岩があるばい。」と熊本弁で励ましの表示板があり、思わず心が和む。雷坂・へらのき平からの道と合流すると、少し先から国見岳への本格的上りのはじまる。その登り初めのところに大きな岩があった。これが展望岩で、登ってみると昨日登った向坂山・黒岩山がよく見え、遠くに祖母・傾もはっきり見える。

しばらく登ると広い窪地に出た。山池湿原と道標がある。湿原は枯れていたが自然林に囲まれて静寂の中の見事な光景である。

さらに登り、内大臣の方から道と合流するとその少し先に力水と呼ばれる潤れた水場を過ぎる。国見岳山頂まで残り600mの最後の登りとなる。一步一步ゆっくり登り、シヤクナゲの花のトンネルをくぐって九州脊梁山地の最高峰である国見岳山頂(17388m)に到着。

三方岳山頂からちようど五時間かかっている。山頂のまわりはシヤクナゲ群落が満開になっており、ピンクの花が新緑にさらに彩りを添えている。

山頂では新しい祠が建築中で、三人の職人が仕事をしていた。新しい銅板の屋根がまぶしく輝いている。これは先史時代に巨石(メンヒル)で築いた祭場で、今でいえば神社の本殿にあたり、天の降神も願った神域といえる。

(国見岳山頂にて)



何のためか分からないけど手を振って見たが、二度、三度旋回して遠くに去っていった。

国見岳山頂を出発し、小国見岳を巻いている縦走路を歩いていると、満開のピンクのミツバツツジが迎えてくれた。五勇岳の手前の稜線上で昼食をとる。

休憩後、ふたたび緩やかな登りの縦走路を進む。五勇の手前からスズタケが縦走路の両側を被うようになり、国見岳から二時間で五勇岳山頂(16622m)に着く。

鳥帽子岳に向かう途中、すばらしい眺望の展望岩に立ち寄り、シヤクナゲ群生地として有名な鳥帽子岳(16917m)には、一時間一五分で着いた。シヤクナゲは残念ながら終わっていたが、山頂からは南側からの展望が開け、雄大な景観が目の前に広がっている。明日登る予定の白鳥山やその奥の市房山が望めた。

少し引き返して縦走路に戻る。鳥帽子岳から椎葉越までの間は背丈以上のスズタケに覆われ、倒木をのりこえてのアップダウン連続だ。尾根道を早足で進み、小さな広場のある椎葉越に到着。古い峠道のおもかげが木立の中の小さな広場に残るところだ。一六時二〇分、そこを本日の幕営地と決めて、そこの総歩行時間は十一時間をこえている。落葉たっぶりの絨毯の上にテント設置。夕食は食料が足りず、節約メニューの塩ラーメン、乾パン、スコッチウイスキー。十八時三十分就寝。



山頂の展望はすばらしく、三六〇度の大パノラマが展開している。市房山、江代山、向坂山、扇山はもちろん、遠く祖母山、傾、本谷山も見え、さらに阿蘇、その向うには九重も見えている。素晴らしい展望を楽しんでいると上空にヘリコプターがやってきて、山頂のまわりを旋回し始めた。

(鳥帽子岳山頂にて)



(次号へ続く)

《5月15日の参考データ》
 幕営地発5時15分〜三方山5時47分/57分
 椎矢峠6時25分/30分
 高岳登山口6時33分/45分
 高岳7時20分/30分
 国見岳10時47分/11時10分
 昼食11時35分/12時20分
 五勇山13時10分/20分
 鳥帽子岳14時34分/40分
 椎葉越にて幕営15時20分

正味歩行時間 || 8時間15分
 歩行距離 || 約20.5km
 (以下次号へ)

飯田勝之

里山の稜線歩き

(その10)

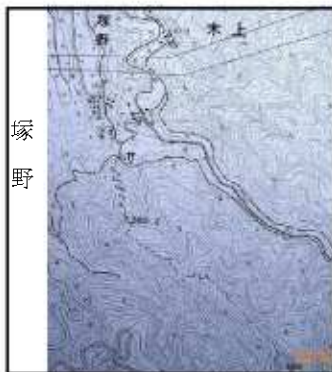
今回は大分市街地に近い野津原の稜線を紹介しよう。七瀬川添いの山林はほとんどがスギ、ヒノキあるいはクヌギの造林地で被われているが、その中にも限られた範囲で天然林があり、里近くにありながら心地よい散策が出来るところがある。その中から二つ。

「塚野」(260.2m)

障子岳山頂から北に伸びる稜線は、二つ目の小ピークから北西に向きを変えて高度を下げ、最後は塚野川と安友川に挟まれて七瀬川に落ち込んでいる。その稜線を塚野の集落から古い山道が上っている。稜線の上部はスギ、ヒノキの造林地であるが、山ろく近くはシイ、カシ、クヌギ、ヤマザクラ、カエデなどの深い林の中である。

胡麻鶴から塚野の台地上がり、真ん中の車道を一番上までつめると、最奥の集落のはずれに神社があり、その上を青少年の森に通じるサイクリングロードが通っている。神社の脇に車を置いて、サイクリングロードを横切るとその向

うに、山の斜面を上る細い道がある。この道は古い山道で、稜線つたいに広域基幹林道「御座ケ岳線」の展望台まで通じている。もう大分荒れているが、趣の深い山道だ。鬱蒼とした照葉樹の中をジグザグに登る道は荒れているがはつきりとしている。ジグザグに登り始めて約二〇分、左カーブのあとすぐに右カーブする掘り割り道の上肩に三角点・塚野(260.2m)がある。ここより道は稜線をじくじく登りて続き、四〇分ほどで林道に出る。ゆっくりと散策したい道だ。



塚野

- ・参考コースタイム：塚野神社↓二〇分↓塚野三角点↓四〇分↓広域基幹林道展望台
- ・地形図25000分の1：野津原

「長ノ谷」(250.7m)

大峠の主稜線から西に下って広

がる、無数の山ひだのひとつで、七瀬川と支流の朝海川に挟まれた丘陵の中の小ピークであるが、ここに至る稜線は趣がある。この小稜線一帯は、植林地と天然林が混在し、天然林は樹種がかなり多い。カエデ、ナラ、クヌギ、アセビ、スタシイ、アラカシ、アカガシ、ハナガガシ、カナメモチ等々。野津原、原村の大分川ダム工事現場に入る道から、金比羅橋を渡って斜面を上れば、ダムで移転した民家のある長尾台につく。ここが登り口となる。

台地の入り口のゲートボール場の西の小径を入り、すぐに左のクヌギ林に踏み込む。入り口はブッシュだが、少し入ればクヌギの中の平らな明るい稜線。その先でヒノキ林となるが、二、三分ですぐに照葉樹の混交林となる。小ピークを越えて下れば馬の背



長ノ谷

お知らせ

十一月例山行のご案内

- ・月日：十一月十五日(日)
- ・目的地：女倉岳(321m)・観音岳(371m)と菊池溪谷温泉(熊本県・菊池市)
- ・出発：十一月十五日(日) 午前五時サニー出発

十二月例山行のご案内

- ・月日：十二月二七日(日)
- ・目的地：釣鐘山(352.1m)と山国温泉(熊本・中津市)
- ・出発：十二月二七日(日) 午前五時サニー出発
- ・現地集合：山国町守実・コアヤマクニに午前七時集合

一月月例山行の

「案内

- ・月日：一月一七日(日)
- ・目的地：若杉山(381m)・砥石山(388m)伊川温泉(福岡県・飯塚市)
- ・出発：一月一七日(日) 午後五時サニー出発

※出発時刻等は、参加者同士の相談によつては変更することがあります。

九州五支部集会

今年日本山岳会九州五支部集会が大分県で開かれます。支部会員・会友の参加をお願いします。

と き：十一月七日(土) 八日(日)

ところ：九重・筋湯温泉 「八丁原ヴェーホテル」

第一日

支部集会：午後四時から 懇親会：午後六時から

第二日

記念山行

ひぜん湯から涌蓋山往復 会費：一二,〇〇〇円 (一泊二食・弁当込み)

参加：二日間とも参加、または一日のみ、あるいは二日目のみ参加等について、加藤まで

申し込んで下さい。

忘年山行と忘年会 のご案内

今年もまた重広恒夫 さんと一緒に

毎年恒例となりました重広恒夫さん(関西支部長)と一緒に当支部忘年山行と忘年会を次のとうり予定します。皆さん奮って参加ください。

尚、当初一二日、一二日を予定していましたが重廣さんの都合により日程を変更しました。間違いないようにご注意ください。

月 日：十二月十九日(土)

二十日(日)

山 行：十九日大分→藤河内

観音滝→木山内岳往復→木浦泊

二十日木浦→杉ヶ越

→新百姓山→檜山→藤河内(交差

縦走)→大分

集 合：十九日 前七時大分発

藤河内登山口八時三十分

二十日 木浦午前八時発

忘年会件宿泊：木浦鉾山

やど梅路 TEL0972

(55) 4167

会 費：九、〇〇〇円(一泊二

食、宴会、弁当込み)当日徴収

※ 十九日木浦にて合流する人は午後六時までやどに集合ください。

出 欠：出欠の返事を同封

のはがきにて十二月十日をめぐりに投函ください。

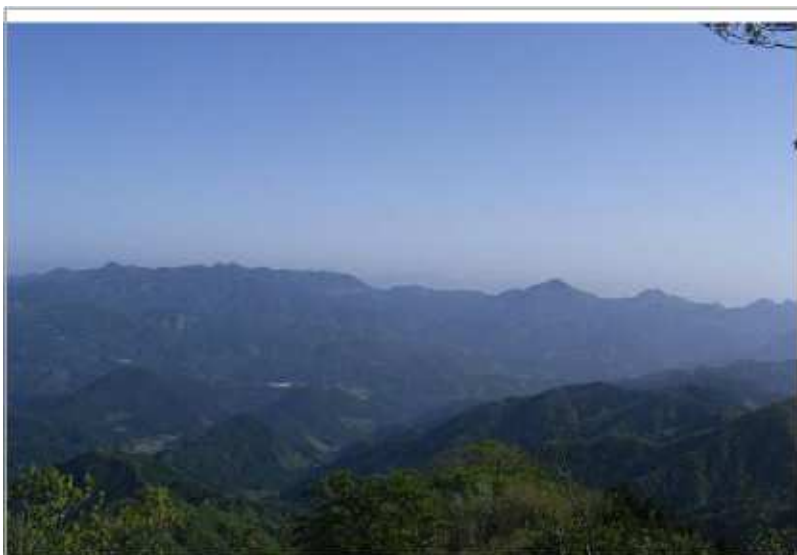
この件のとりまとめ連絡は加藤まで申し込んで下さい。

第十六回視聴覚障害者支援登山大会

これまで府内山岳会が積極的に取り組んできましたが、日本山岳会東九州支部も公益的行事として一緒に取り組むことにしています。皆さん積極的に参加してください。

ニニは何処?

・この写真は何処から何処を撮ったものでしょう?



・お分かりの方は事務局まではがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。(二名までで、正解多数の場合は抽選します。)

・締め切り十一月三十日

前回の正解は稲積山から鹿嵐山、鬼落山、高山を撮ったものでした。

・日時 平成二十一年十一月八日(日曜日)

・場所 宇會山(六四四ミ)

(大分市野津原)

・集合場所 のびゆく丘駐車場

(建物なし・駐車場のみ)

・日程

九：〇〇 駐車場集合

九：三〇 開会式・出発

一：〇〇 山頂到着(昼食)

一：三〇 山頂出発

一：四：三〇 駐車場到着・閉会

※ 連絡先：佐藤善則会員(三)

「：〇九七二五六八〇一

五)

※ 九州五支部集会和重なってしまいましたので、どちらかに参加して下さいさるようお願いいたします。

後記

○ 今季号は少し早めに編集作業に入ろうと思いい、PCに向かっている時はちょうど、大型台風一八号が紀伊半島に上陸のニュースの時でした。

○ ところが、思うように編集がはかどらずに、おおむねこの作業の終了しようとしていた今夜は、台風二〇号がフィリピン沖から急に進路を北東に変えて日本に近づき小笠原へ接近しています。

○ そのためか、急に秋めいてきた昨日、今日・・・。夕方の散歩道の虫の音もやや低くなり、秋の初めのあのにぎやかな声はなくなってきたようです

○ コオロギ、キリギリス、ウマオイ、クツワムシ、そんな中にチンリロリンと涼やかな松虫や、チンチンと小さなカネタタキ、そんな中にひとときわ澄んだカンカンの声。
○ 地球温暖化の中でも、秋は日に日に深まっています。

(K・I)

日本山岳会東九州支部報 第47号

2009年(平成21年)10月25日(日)

発行者 梅 木 秀 徳之

編集者 飯 田 勝 之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-20

サニースポーツ内 西 孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 (故) 佐藤正八